

エメ・セゼール論 II

砂野幸稔

3. 黒人意識

しかし、セゼールのネグリチュードは決してゼロからたち現れたわけではない。生まれ出ようとするネグリチュードの産婆役を果たしたのは、セゼールがパリでの学生時代を過ごした両大戦間期という「時代」だった。

(1) 植民地帝国フランス

1931年、セゼールがパリに着いた年、パリでは「国際植民地博覧会」が開催され、フランスは自らの植民地帝国を世界に誇示しようとしていた。パリは巨大な植民地帝国の首都であった。ブルトンらシュルレアリストたちは反「植民地博覧会」のピラをまくが、黒人セゼールはまだ彼らと出会っていない。

世界恐慌の影響はフランスではまだ緩慢にしか現れておらず、19世紀末に主導権を握ったフランスブルジョワジーの近代合理主義は基本的に健在であった。しかし、「普遍」を自称し、「文明化の使命」を掲げるフランスにおいても、第一次世界大戦の衝撃は近代文明の原理そのものへの疑念を生じさせていた。大戦直後にドイツで出版されたシュペングラーの『西洋の没落』に典型的に見られる危機意識は、フランスにおいてもすでに現れていたのである。

「^{ユラン・ヴィタル}生の躍動」を強調するベルグソンの哲学は、勝ち誇っていたブルジョワジーの近代合理主義に対するそうした疑念の哲学的表現でもあった。後にセゼール、サンゴールら黒人学生に深い影響を与えることになるドイツの民俗学者レオ・フロベニウスのアフリカ研究は、ベルグソンへの深い共感とヨーロッパの近代合理主義への疑念に基づくものであった。そしてセゼール自身の中にもベルグソン哲学は血肉となって脈打っている。

しかし、ブルジョワ近代合理主義へのもっともラディカルな批判を展開し、戦闘的な対抗文化を押し出していたのはシュルレアリスムであった。セゼー

ルらのネグリチュードを予告するエティエンヌ・レロ、ルネ・メニルらの『正当防衛』(後述)は、シュルレアリスムの「反逆」を、自らの黒人としての「白い」世界に対する反逆の決定的な武器であると信じさせた。セゼール自身がシュルレアリスムに近づくのは1941年のマルティニックでのブルトンとの出会い以降のことだが(しかもそれは一時期に過ぎない)、シュルレアリストたちの「祖先」ランボー、ロートレアモンから、セゼールは「この世界」に対する自己の他者性と拒否の姿勢、そして彼らの「言語」を学びとっている。

他方、ロシア革命とソ連の出現は、ブルジョワ的価値と社会秩序に対する強力な対抗文化としてのマルクス主義の展開をフランスにおいてももたらしていた。それは、両大戦間期の植民地独立運動に大きな影響を与えただけでなく、この時期のさまざまな黒人運動にもその息吹を吹き込んでいた。

第二次世界大戦後のフランスを揺さぶることになる「植民地問題」は、この時期にはすでに姿を現し始めていた。ウィルソンの唱えた「民族自決」の原則は、中部および東部ヨーロッパに新しい独立国家を生み出したものの、アジア・アフリカの植民地については適用されず、敗戦国ドイツの植民地が「委任統治」という名目で戦勝国に再配分されたただけだった。植民地知識人を中心とした植民地主義批判の動きは、こうした不公正の中にある「有色人種」に対する人種主義と植民地支配の不正義を指摘するものだった。 Kommunismus はしばしばそうした運動の思想的な梃子となった。

1919年、W.E.B.デュボイスがパリで組織した第一回パンアフリカ会議は、第一次世界大戦後のヨーロッパにおけるアフリカ系人の人種主義、植民地主義批判の最初の動きだった。1921年にはヴェトナムのホー・チ・ミンが中心となってアジア・アフリカのフランス領植民地出身の知識人を糾合して「植民地同盟」が結成され、1924年にはダホメーのコジョ・トゥヴァル・ウエヌーが「黒人種防衛世界連盟」を、1926年、セネガルのラミーヌ・サンゴールが「黒人種防衛委員会」を組織し、彼らはそれぞれ「パリア」、レ・コンティナン「大陸」、ラ・フランス・ネーグール「黒人権」などの機関誌を発行して活発に活動していた。

セゼール自身はこうした動きとは直接関わりを持たない。しかし、「白い」普遍主義と「文明化」の虚偽は、セゼールがパリに着いた時にはすでに暴かれ始めていたのである。

(2) 「ニグロ問題は当世の流行」

1921年12月、ゴンクール賞委員会は、フランス領ギアナ出身の黒人作家ルネ・マランの『バトゥアラー-真の黒人小説』を受賞作として選んだ。作品自

体は、植民地行政官としてのアフリカでの経験をもとに、姦通の物語を軸にしながらアフリカ人社会の「驚くべき」風俗を描く、当時流行し始めていた「植民地もの」にすぎなかったが、「ニグロにゴンクール賞」というだけでも大変なスキャンダルであったうえに（アメリカ合衆国と日本では一年後にはその翻訳が出版されている。その2年前に同じ賞を受賞したブルーストの作品でさえまだ翻訳されていなかった）、その序文が植民地支配の虚偽と暴虐を暴くものであったために物議をかもし、ついにマランは植民地官吏の職を辞することを余儀なくされてしまった。サンゴールはマランを「ネグリチュードの先駆者」とするが、マラン自身には「フランスの良心」として植民地支配の暴虐を告発はしても、自らの「黒人性」を主張しようなどという気はなかった。むしろマランに続いたのは、27年に『コンゴ紀行』発表して植民地支配の悲惨な現実を告発したアンドレ・ジッドだった。

マランは、その同じ序文のなかで「ニグロ問題は当世の流行である」⁽²¹⁾と書いている。実際、第一次世界大戦後のフランスでは、植民地アフリカと黒人への関心が一種のブームと^{ディライヤール・セネガル}言っているような様相を示していた。

そのひとつの理由は「セネガル狙撃兵」が大戦でフランスのために払った大きな犠牲だった。「セネガル狙撃兵」とは、セネガル植民地からの最初の黒人議員であったブレイズ・ディアニュが、「フランスへの血の貢献」によるアフリカ人市民権の拡大を期待し、クレマンソーの依頼に応じて徴募にあたった植民地部隊である。彼らは、ヴェルダン^{ニグロワリ}の激戦などで多大の犠牲を出しながら驚嘆すべき勇敢さを示し、そのことがフランス人一般の黒人への同情と関心を高めていたのである。マランのゴンクール賞受賞もこうした「ニグロびいき」がもたらしたものだ。ゴンクール賞の選考委員長ギュスターヴ・ジュフロワは後に次のように語っているのである。

われわれは、ひとりのニグロにゴンクール賞を与えることで、フランスに忠誠を尽くした一つの人種に敬意を表したかったのです⁽²²⁾

参戦したアメリカ合州国の黒人兵の存在も大きかった。西部戦線に投入されたアメリカ黒人兵は総数20万にのぼり、彼らの中からも輝かしい戦績を残すものが相次いだ。彼らは「ニグロびいきのフランス」を見出し、そのことは、その後相次いだラングストン・ヒューズ、カウンティ・カレン、クロード・マッケイらニグロ・ルネサンスのアメリカ黒人作家のフランス滞在と無縁ではない。

アメリカ黒人兵たちとともにジャズもフランスに上陸した。25年来仏したジョゼフィヌ・ベイカーは半裸でチャールストンを踊り、「ニグロ・レビュー」とジャズは一世を風靡した。27年にリンドバークが大西洋横断を成し遂げると「リンディ・ホップ」が流行した。

他方、第一次世界大戦前に遡るピカソらによる「ニグロ芸術」の「発見」や1921年に出版されたブレーズ・サンドラールの『アントロジー・ネーグル』、そして同じ年に出版された民族学者モーリス・ドラフォスの『アフリカの黒人』は、フランスの知識人がアフリカの黒人文化にも関心を抱き始めていることを示していた。27年にはドラフォスの『ニグロ』、植民地学院所長ジョルジュ・アルディの『ニグロ芸術』が出版され、さらに32年には、とくにセゼールに大きな影響を与えることになるドイツ人類学者レオ・フロベニウスの『アフリカ文明の歴史』の部分仏訳が出版されている。

「ニグロ」は注目されていたのである。

(3) 黒人意識—アメリカ黒人文学のインパクト

こうした時代の雰囲気の中で、パリの黒人知識人の意識に強烈なインパクトを与える新しい息吹がもたらされた。アラン・ロックが「ニュー・ニグロ」と名付けた、同時代のアメリカ黒人たちの新しい文学との接触であった。

その窓口をセゼールら黒人学生たちに提供したのは、1931年から32年にかけてハイチ人サジャー博士とともに『黒人世界評論』を発行したマルティニック人アンドレ・ナルダル、ポーレット・ナルダル姉妹である。「黒人種の知的エリートと黒人の友たち」の機関誌となり「ニグロ文明と黒人種の神聖なる祖国アフリカの豊饒を研究し、知らしめる」ことを目的として掲げ、すべての記事を英仏対訳で発行したこの雑誌は、20年代後半にハイチで『原住民評論』を中心におこった黒人文化再生運動の動きを引き継ぐとともに、アメリカ合衆国の「ニュー・ニグロ」たちの息吹を伝えていた。

アメリカ合衆国では、第一次大戦後パンアフリカニズム運動を率いていくことになる W.E.B. デュボイスが、すでに1903年に著書『黒人の魂』において「20世紀の問題はカラーラインの問題である」と喝破しており、さらに1917年からはジャマイカ出身のマーカス・ガーヴェイによるアフリカ帰還運動が強烈な黒人意識を鼓吹していた。そして、第一次大戦後ニューヨークの世界最大の黒人密集地ハーレムで、それまで蓄積されてきたアメリカ黒人の力を一挙に開化させたのが「ニグロ・ルネッサンス」であった。白人スノビズムの黒人音楽礼賛、ハーレム詣での流行を生みだし「ハーレム・ルネッサンス」とも呼ばれたこの新しい息吹のなかで、黒人文学はそれまでに作り上げ

られた屈従と忍耐、あるいは軽薄と滑稽という黒人のステレオタイプを打ち壊し、自負、怒り、そして自己主張と抗議を表現し始めていた。

ナルダル姉妹のサロンは、カリブ、アフリカ出身の黒人学生と、当時パリに滞在、あるいはしばしば訪れていたクロード・マッケイ、ラングストン・ヒューズ、カウンティ・カレン、ジャン・トゥーマーらニグロ・ルネサンスのアメリカ黒人詩人、作家たちとの出会いの場所となっていた。セゼール自身はこのサロンの「小ブルジョワ的雰囲気」を嫌ひまったく出入りをしなかったが、社交的なサンゴールはこのサロンの常連となり、『黒人世界評論』の注意深い読者として彼らの作品にすでに親しんでいたセゼールは、サンゴールらを通じて彼らと出会っていた。セゼールは学士号取得後、37年に高等師範学校の修了論文として「合衆国のニグロ・アメリカ詩における南部のテーマ」を提出する。ニグロ・ルネサンスの黒人詩人たちから彼が何を受け取ったか、たとえば後に彼が『熱帯』^{トロピク}に書くことになる次の文章が明らかにしてくれる。

ニグロ詩人の主旋律をなす感覚は不寛容^{レエル}の感覚である。現実に対する一なぜなら醜悪だからだ一、世界に対する一なぜなら籠に閉じ込められているからだ一、生に対する一なぜなら太陽の街道で強奪されてしまったからだ一不寛容だ。そして苦悩と、押し殺された憤怒と、長い間口を閉ざしてきた絶望という重い背景から、ひとつの怒りが立ち昇り吹鳴を響かせ、アメリカは、体制順応主義のぐらつく寝台の上で、どんな恐ろしい憎悪がこのような叫びを生み出したのか、不安にかられるのだ。(23)

(4) 黒人意識－『正当防衛』

『黒人世界評論』のブルジョワ的融和主義とはとうてい相容れないこの不寛容、「拒否」の感覚を、最初にフランス語で言語化しようとしたのはエティエンヌ・レロ、ジュール・モノロ、ルネ・メニルら、セゼールより少し年長のマルティニック出身の黒人学生たちだった。彼らは『黒人世界評論』の創刊以来の若い寄稿者だったが、ナルダル姉妹らの融和主義的傾向をブルジョワ的同化主義として批判し、1932年6月、創刊号にして最終号となる『正当防衛』第1号を発行する。『黒人世界評論』が発行を停止してから二ヶ月後のことである。緒言で彼らはこう宣言する。

この地球上でもっとも嘆かわしい存在である、フランスの有色人種ブル

ジョワジー出身のわれわれは、すべての行政官、政府閣僚、国会議員、実業家、商人どもの屍に向かって宣言する—そしてこの宣言は撤回しない—、この階級の裏切り者として、われわれは裏切りの道を可能な限り遠くへ進もう、と。われわれは彼らが愛し崇めるものすべて、彼らが糧と快楽を引き出しているすべてに唾を吐きかける。⁽²⁴⁾

彼らは、「白いモラル、白い文化、白い教育、白い偏見をはちきれんばかりに詰め込まれ」、「自らの作品を、白人が著者の肌の色に気づかずに読むことを最大の名誉と考えている」⁽²⁵⁾ アンティル人「開化民」たちを痛烈に批判し、「ニュー・ニグロ」たちの聲に習い、黒人としての感性を解放することを宣言する。

黒いアメリカから立ち上る風が、わがアンティル諸島から、老いさらばえた文化の空虚な果実を—願わくは—すみやかに洗い流してくれるだろう。ラングストン・ヒューズとクロード・マッケイという二人の革命的黒人詩人が、われわれに、深紅のアルコールに浸された、生へのアフリカの愛、愛のアフリカの歓喜、死へのアフリカの夢想をもたらしてくれた。そしてすでに、ハイチの若い詩人たちはわれわれに、未来のダイナミズムに満ち満ちた詩句を示しているのだ。⁽²⁶⁾

彼らは、シュルレアリスムとマルクス主義という両大戦間期に現れた新しい対抗文化を胸一杯に吸い込み、アメリカ黒人文学のもたらした強烈なインパクトに突き動かされて、その息吹の中に自らの黒人意識を込めようとした。しかし、奇妙なことに「黒人プロレタリアート」の文学を打ち立てようとした彼らが生み出したのは、後にサルトルがレロの詩についていみじくも指摘したように、「黒人であれ、白人であれ、これらの詩を『シュルレアリスム革命』なり『ミノートル』なりに寄稿するヨーロッパ人の作としない人があろうとは、とうてい思われない⁽²⁷⁾」ものに過ぎなかった。

西欧を否認し自ら「他者」たろうとするシュルレアリスムの戦略と、西欧資本主義を否認し資本主義社会に対する「他者」たるマルクス主義に依拠する彼らは、自らの他者性の足場をこれらの「白い反逆」に委ねてしまうことによって、自らの「反逆」をも漂白してしまったのである。しかも彼らは、「アフリカ」について語りながら「アフリカ」は外部にしか存在せず、自らの「アンティル黒人」という狭い枠を取り外すことができなかった。セゼー

ルは『黒人世界評論』に対してだけでなく、『正当防衛』とも距離を保ち続けるが、彼の『正当防衛』に対する批判はまさしくそこにあった。

ただ、ほぼ半世紀後ルネ・メニルが『正当防衛』のリプリント版への序文で書いているように、『正当防衛』は「その叫びと憤怒によって予告し、約束して」⁽²⁸⁾いた。

(5) 黒人意識－「源泉への回帰」

『正当防衛』の「同化」された自己への憤怒、そして自らをがんじがらめに縛りつけるその軛を死にものぐるいで振り払おうとする彼らの身ぶりはセゼールのものでもあった。しかし、セゼールは同化主義批判は共有しながらも、「白い」世界に対して「他者」の視線を投げかけるための足場を得るための苦闘をまだ続けていた。

それは『正当防衛』の詩人たちが行ったように単に「アフリカ」の外皮をまとうことではなく、自らの内に「アフリカ」を確信することであった。コロンブス以来の黒人の歴史を、強いられた歴史もその歴史によって蒙らされたゆがみも引き受けた上で、アフリカを足場として共有しえるある特権的な場所を見出すことが必要だったのである。それがセゼールにとってのネグリチュードだった。

そのためには「白い」普遍の外側に、「価値」としてのアフリカを措定する必要があった。それはひとつの「神話」をあえて作り出すことでもあった。しかし、この「アフリカ」という神話はこの現実に裂け目を生じさせる力を与えるのである。

「アフリカ」を自らの内に見出すこと、セゼールが「源泉への回帰」と呼んだこの自分自身の内部への降下も、すでにハイチでその最初の歩みが始まっていた。

政治的混乱を口実に1915年から19年間にわたったアメリカ軍の占領は、この白人人種主義者たちを前にしたハイチの知識人の間に、ハイチの黒人文化に再び注目しその価値を再評価する文化再生運動を生み出していた。奴隷制を打ち倒し最初の黒人独立国となったハイチだったが、独立後も文化的にはフランスの模倣からなる「開化民」の文化が支配文化となっていた。このような模倣の文化を不毛と看做し、民話や信仰など民衆の中に伝わる黒人文化からハイチ独自の文化を創造しようとしたのである。この運動の中で中心的な役割を果たしたジャン・プリスマルスは28年に出版された『伯父はかく語りき』において次のように言う。

自らを「色のついた」フランス人と看做すことによって、われわれはただ単にハイチ人であるということ、すなわちある歴史的諸条件の下で生まれた人間であるということを忘れている。

(中略)

われわれがわれわれ自身であるということは、祖先から継承された遺産のいかなる部分を欠いても成しえないことであり、しかもその遺産の—〇分の八はアフリカの賜物である。⁽²⁹⁾

自己自身であること、それはセゼールが始めようとしていた闘いでもあった。そしてこの闘いへの跳躍台となったのが、当時新たに現れつつあったアフリカについての人類学的研究のもたらした知見だった。なかでも、32年にフランス語訳が出版されると同時に「パリの黒人学生の枕頭の本」⁽³⁰⁾となり、ネグリチュードの誕生に決定的な役割を果たしたのがレオ・フロベニウスの『アフリカ文明史』だった。

すでにセゼールたちはモーリス・ドラフォスの『アフリカの黒人』(21年)、『ニグロ』(27年)からアフリカ古代帝国の存在とその高い文明水準を学び、黒人の劣等性神話の明確な否認を彼から得ていた。しかしドラフォスは、文化的相対主義とアフリカ文化の独自性を説きながらも、現在のアフリカは地理的歴史的諸条件の故に蒙った遅れを取り戻すために、白人世界の後を追うほかないとしていた。ドラフォスは散文的であり、あらゆる「神話」を拒んでいた。

それに対してジョルジュ・アルディは『ニグロ芸術』(27年)において「同化主義」を徹底批判し、「黒人種」の「独自の特性」を歌い上げた。それは、西欧人と異なる「原始的天性」を語るものであり、『人種不平等論』のアルチュール・ゴビノーと同種の人種主義イデオロギーとしての性格を明確に帯びていたが、ひとつの「黒人種神話」を与えるものではあった。サンゴールはアルディから彼のネグリチュードへのひとつの足場を得る。1939年、サンゴールは言うだろう。

情動的感受性。理性がギリシア人のものであるように情動はニグロのものである。⁽³¹⁾

しかしセゼールにとっては、このような生物学的人種特性に依拠する議論は論外であった。

レオ・フロベニウスがセゼールをはじめとする黒人学生たちを熱狂させたのは、彼らがフロベニウスの身構えの中に、「同化」の軛を振り払い「自己自身である」こと、消極的自己認識から積極的な「他者」としての自己主張を可能にする「神話」を必要とする自ら自身の身構えを読みとることができたからである。

ドイツ神秘主義の流れを引き、シュペングラーの『西欧の没落』を絶賛するフロベニウスは、18世紀以来、勝ち誇るフランス近代合理主義を前に屈折した自己意識を抱えてきたドイツの民族的自己を、フランス的西欧近代に「植民地化され」「奴隷化され」た存在として捉え、西欧近代による「人間の破壊」を非難する。そして同時代のドイツの思想家たちが、同じ認識から出発してナチズムにつながる民族主義的神秘主義を生み出していこうとしていたとき、フロベニウスはこの「西欧」の否認と乗り越えをアフリカに仮託しようとしたのである。彼は、合理主義と実証主義に基づく民族学が「世界の表層」しか捉えられず「深層についての直感的把握」をなし得ないことを批判し、「諸現象の本質に感動し、諸事象によってではなく、それらを規定する『現実』、すなわち諸事象の本質を把握する」⁽³²⁾ 必要性を説く。そして彼が示すアフリカは、ドラフォスの散文的な文化相対主義が描く「劣等ではない」アフリカではもはやなく、詩的な輝きさえを帯びた神話的アフリカだったのである。

彼はヨーロッパ人航海者の記録を引きながら15世紀のコンゴ王国についてこう語る。

絹とビロードを纏いひしめく群衆、その隅々まで秩序の行き渡った大国家、強大な王、豪華な産業。骨の髄まで文明化されているのだ！⁽³³⁾

そして、

すべての人々の立居振舞、道德規範には、小さな子どもから老人に至るまで、まったくの自然体でありながら、威厳と優雅さが刻み込まれていた。⁽³⁴⁾

そしてこの人々の社会の深層にフロベニウスが見出した「『現実』すなわち諸事象の本質」とは次のようなものであった。

支配的な感覚は自然のあらゆる要素との調和である。諸事象は現実に従属している。そこから得られる自然認識は明確に定義された「自己放棄の運動」なのである。⁽³⁵⁾

「万物の本質に心を奪われ、身を委ね」、「表層には無頓着だが万物の運動に心を奪われ」、「世界の動きに和合する」⁽³⁶⁾ セゼールのネグリチュードは、こうしてフロベニウスによって与えられた「神話」を跳躍台として生まれる。セゼールは「源泉」としての「アフリカ」を見出すことによって、引き裂かれた自己を統一するひとつの神話を得たのである。

(6) ネグリチュード：『黒人学生』

セゼールが、こうして到達したネグリチュードの意識を最初に言語化したのは、彼がサンゴール、ダマスらと1934年に創刊した『黒人学生』誌においてであった。

この頃、パリの黒人学生たちは出身地域別の学生協会を作り、一種の学生新聞を発行し始めていた。1932年には「マルティニック学生協会」が機関誌『マルティニック学生』を発行し始め、33年にはサンゴール、ビラゴ・ディオップ、ウスマン・ソセラセネガル出身のアフリカ人学生たちが「西アフリカ学生協会」を結成してやはり機関誌を発行していた。本来人付き合いが不得手で孤独な読書に引きこもることを好んだセゼールが「マルティニック学生協会」の活動に参加し始め、34年にその会長に選出されたのが『黒人学生』誌誕生のきっかけだった。

セゼールはサンゴール、ビラゴ・ディオップ、そして仏領ギアナ出身のレオン・ゴントラン・ダマスらに参加を呼びかけ、35年3月、『マルティニック学生』は『黒人学生』と名称を変えたのである。ダマスはこう語っている。

『黒人学生』はカルティエ・ラタンを支配していた部族主義、派閥制度を終わらせることを目的とする戦闘的學生新聞だった。われわれは、本質的にマルティニック人学生であったり、ギアナ人学生であったり、アフリカ人学生であったり、マダガスカル人学生であったりすることをやめ、ただの同じ黒人学生となったのだ。タコツボ生活は終わったのだ⁽³⁷⁾。

この学生新聞は36年までに5号ないしは6号まで発行されただけで終わるが、セゼールはここで初めて「ネグリチュード」という言葉を使っている。この学生新聞でセゼールはシュルレアリスムに全面的に依存する『正当防

衛』の「同化主義」を批判し、シェルシュール高等中学校の師であったジルベール・グラシアンが主張する文化的混血論を批判する。生物学的混血の程度がどのようなものであれ、アンティル黒人も単に黒人なのであり、自らを二つの人種、あるいは二つの文化の混合物と看做すことは自らを疎外することにほかならない。「私は半分黒く半分白い」と言ったところで、「私」のなかの「白い」視線が「私」のうちに見出すのは「完全には白くない」ということなのであり、「ニグロ」としての疎外からの解放は、「ニグロ」であることを全面的に引き受け、それを誇りとするところからしか始まらない。そしてそれは黒人としての「源泉への回帰」によって初めて可能になる、とセゼールは主張するのである。

しかしこのときすでに、深い信頼と友情で結ばれながらも、セゼールとサンゴールの見解の相違も明確になっていた。黒人の生物学的人種特性に傾斜することで、すでにセゼールとは異なったネグリチュード認識を示していたサンゴールは、さらに「人種主義」を乗り越える「総合的」立場として、グラシアンらとともに「文化的混血」を語り始めていたのである。彼は自らを黒人の「情動」と白人の「理性」を兼ね備えた「文化的混血」である、としていた。

4. 『帰郷ノート』

しかし、セゼールにとっても、「アフリカ」という神話はひとつの跳躍台ではあり得ても、そこに身を没すべき場ではなかった。「文化的混血」論という安易な「総合」を拒むとすれば、それではどのような乗り越えが可能なのか。セゼールは、つぎにこの「神話」を乗り越えなければならない。フランスの普遍に同化されることを拒み、「自己自身であること」を選んだセゼールは、人種主義を乗り越えたより高次の普遍を見出すことを望むのである。それがセゼールを『帰郷ノート』の執筆へと向かわせる。

1935年、高等師範学校に入学を許された年、セゼールは精神的危機を経験する。黒人であり、植民地の奴隷の子孫であり、しかしフランス人であり、文学教授となるべく教授資格試験の準備をする自らが、「自己自身」でありつつどのような未来を展望するべきなのか、それが問題だった。

高等師範学校に合格してから私は学士号の準備を続けていました。まもなく、私はひとつの危機を迎えました。肉体的な不調と精神的な落ち込みです。大学での古典の勉強は、私には、人生からあまりにも遠く、私の

したいことからはあまりにもかけ離れているように思えたのです。その結果、私は教授資格試験の準備にはまったく力を入れなくなりました。そして私は詩を書き始めたのです。⁽³⁸⁾

『帰郷ノート』は1936年頃から徐々に書き始められた。明確な方向性があったわけではない。セゼールは書くことによって自らの道を探していたのである。あるときセゼールはそれまでに書きためた定型詩をすべて廃棄する。『帰郷ノート』は「詩」を書こうという意図を放棄したところから生まれた。

かなりゆっくと、1936年頃、ばらばらに書き始めていたはずです。ともかく、確か1936年頃、ノートとして書き始めていました。ノートとしてというのは、もう詩を書くのをやめていたからです。伝統的な韻律はひどくわずらわしく、身を縛られる思いでした。不満だったのです。ある日、私は思いました。「結局のところ、何もかも放り出してしまおう」と。それから私は、そこから何が出てくるか、散文なのか詩なのか、わからないままに書き始めたのです。肝心なことは、胸につかえていたことを言葉にすることでした。それで「ノート」というひどくありふれたタイトルを選んだのです。実際のところ、それは詩になりました。別の言葉で言うと、私は定型詩に背を向けた瞬間に詩を見出したのです。⁽³⁹⁾

『帰郷ノート』が書き始められた1936年夏、セゼールは渡仏以来初めての帰郷をしている。セゼール自身は明確に語っていないが、少なからぬ論者が、この「帰郷」が『帰郷ノート』のもうひとつの、そして直接的な契機を与えたと考えている。実際、『帰郷ノート』におけるセゼールの意識の弁証法的発展のドラマは、マルティニックに向けての「出発」を契機として始まっているのである。

そして『帰郷ノート』は、セゼールが「帰郷」し、マルティニックの現実を引き受けながら、「普遍的な生に、人類の人間化に貢献する」⁽⁴⁰⁾ための基本的な足場を構築するためのものであった。

『帰郷ノート』においてセゼールは、西欧の与えた「普遍」を乗り越え、「アフリカ」という特殊を乗り越え、さらに、到達したネグリチュードを梃子に、ついにはネグリチュードをさえ乗り越える「異例の高み」⁽⁴¹⁾まで上昇している。セゼールはこの「高み」、すなわちネグリチュードを通じて到達し得た新たな「普遍」を見出すことで初めて、「黒い穴」すなわち黒人の

共通の運命を自らの場として選びとる。「ニグロ」を引き受けえない白い「普遍」を越えた、真に人間的な未来を約束する新しい「普遍」へと導く特権的な場であるがゆえに、ネグリチュードは生きられるに値するのである。

1939年8月、『帰郷ノート』の第一草稿はパリの小雑誌『ヴォロンテ』誌に掲載された。それはセゼールの二度目の、そして最終的な帰郷の数日前のことだった。この時、『帰郷ノート』はまったく注目されず、パリでは完全に忘れ去られてしまう。しかし、セゼールの現実の「帰郷」によって、『帰郷ノート』はマルティニックで甦り、新たな生を与えられることになる⁽⁴²⁾。

5. 「帰郷」 - 『熱帯』^{トロピック}

1937年、セゼールは妹ミレイユの友人であったシュザンヌと結婚し、38年、長男ジャックが生まれる。同じ年、事実上勉学を放棄していたセゼールは教授資格試験に失敗し、マルティニックへの帰郷を決意する。数カ月をわたって『帰郷ノート』の完成に専念した後、セゼールは完成した『帰郷ノート』の草稿をいくつかの出版社に持ち込むがすべて拒否され、高等師範学校の教師の手を経てようやく『ヴォロンテ』誌の編集者に受け入れられた。こうしてパリでの八年間の生活は終わったのである。39年8月末、セゼールは妻シュザンヌ、長男ジャックとともにフランスを発ち、9月中旬にマルティニックに着いた。セゼールの乗船の数日後、ドイツ軍がポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発した。セゼールの乗った船はフランスへの帰路、ドイツ軍の魚雷によって撃沈された。

10月、セゼールは母校シェルシェール高等中学校の教師となり、文学を担当する。同僚には『正当防衛』誌のルネ・メニルがおり、生徒の中にはフランツ・ファノン、エドゥアル・グリッサンらがいた。ランボー、ロートレアモンを講じ、アフリカ文明を語り、「ニグロであることは素晴らしい」と説くこの教師は、ひとびとを戸惑わせると同時に、マルティニックの若いエリートたちに強烈な影響を与えることになる。

1940年6月、パリは陥落し、7月、ペタン元帥のヴィシー対独協力政府が成立する。マルティニックにおいても、ヴィシー政権によってアンティル・ギアナ高等弁務官に任命されたフランス海軍北大西洋艦隊司令官ロバール提督が、「国民革命」を唱えるペタンにならって人種主義的独裁体制をしく。彼の艦隊は英国艦隊によってフォール・ド・フランス港に封鎖され、1万2000の水兵が人口4万5000のフォール・ド・フランスに、その後3年にわたって露骨な人種主義をまき散らすことになる。セゼールの前には、アメリ

カ軍占領下のハイチでジャン・プリスマルスらが経験した事態があった。しかも相手はファシストたちだった。

41年4月、セゼールは妻シュザンヌ・セゼール、同僚ルネ・メニルらと『熱帯』誌を創刊する。その創刊の辞でセゼールは言う。

無言の、不毛の大地。われわれの大地のことを私は言っているのだ。私の聴覚はカリブ海を覆う空恐ろしいまでの「人間」の沈黙を測る。ヨーロッパ。アフリカ。アジア。私には聞こえる、鋼鉄のうなりが、叢林のタムタムが、菩提樹に囲まれた寺院の祈りが。そして私は語っているのが人間であることを知っている。相も変わらず、ひたすら私は耳を傾ける。だがここでは、声の異様なまでの萎縮、積年の萎靡沈滞、驚くべき緘黙。街もない。芸術もない。詩もない。文明もない。真の文明、つまり、人間の世界への投射、人間による世界の造形、人間の刻印を刻み込んだ宇宙の鑄造としての文明は、ということだ。

死よりも恐ろしい死だ。そこで生者は漂っている。

(中略)

しかしもはや世界に寄生しているときではない。むしろ世界を救済することが問題なのだ。雄々しく、臍を固める時である。

* * *

どこを向いても闇が広がっていく。一つまた一つと家々の明かりは消えていく。人々の叫び、獣の咆哮のなかで、闇の包囲は狭められていく。だが、われわれは闇に対して否と言う者たちなのだ。(43)

セゼールの目に映るマルティニックの姿は無惨なまでに否定的である。人々は一切の可能性を自ら閉ざしている。諦めによって、無気力と怠惰によって。セゼールの言葉はマルティニックの知識人に対する挑発であると同時に、「沈黙の大地から立ち上がる叫び(44)」を期待するセゼールの祈りでもある。そしてファシストたちのもたらした「闇」に対する闘いとその契機とならなければならない。

『熱帯』は、45年9月に最終号が発行されるまで4年間にわたって発行された。42年半ばから43年始めまで『熱帯』は検閲による発行停止処分を受け、セゼール自身も辞任圧力を受けるが、43年、アメリカ軍の介入によって食料輸入が断たれると、民衆の不満の爆発を前にロベール提督は辞任し、新たに就任したド・ゴール派のポントン総督の下で『熱帯』は再び発行許

可を与えられている。発行部数わずか500のこの小冊子の読者は、セゼールたちの生徒のほかは一部のマルティニックのエリートに限られていた。だが、ニグロを語る脚韻も韻律もない詩を掲載し、アフリカと黒人ディアスポラについて執拗に語る『熱帯』は、若いエリートの一世代全体に巨大な影響を残したのである。

そして『帰郷ノート』へのもっとも重要な加筆が行われたのもこの時期のことである。アフリカへの沈潜の部分は『熱帯』に「文学宣言にかえて」として掲載されたものであり、それはマルティニックの否定的な現実の彼方に幻想のアフリカを指定する第二次大戦後のセゼールのアフリカへの強い傾斜を予告している。実際、『帰郷ノート』第一草稿までのセゼールは、「神話」としてのアフリカを「白い普遍」から身を引き離すための契機として必要としていたとしても、サンゴールの「幼年期の王国」のように幻想化されたアフリカからは常に距離を取っていた。しかし、マルティニックにおける「この現実」へのセゼールの「不寛容」は、「この否定的な現実」の否定の契機として、「趣もなくまがいのもの」マルティニックの文化と社会ではなく、「真正」のものとしてのアフリカを指定させることになるのである。彼が『熱帯』を通じて行おうとしたことは、自らが「ニグロ」であることを認めず「まがいのもの」白人でありつづけるマルティニック人に象徴的な死を与え、アフリカ系人として再生させることであった。

この間にセゼールには二つの重大な出会いがある。ブルトンとの出会いとハイチとの出会いである。

41年のブルトンとの出会いについては、ブルトン自身が『偉大なる黒人詩人』の中で語っているが、それはセゼールにとっても劇的な出来事であった。ブルトンは二重の認知をセゼールに与えたのである。ひとつは『帰郷ノート』以来のセゼールの歩みへの認知である。ブルトンはセゼールの内にシュルレアリストを見出した。セゼール自身は「ジュールダン氏が散文を作るように⁽⁴⁵⁾」シュルレアリストであったに過ぎないが、この認知はセゼールに自らの歩みに対する確信を与えることになった。

ブルトンはわれわれに「大胆さ」を与えました。われわれが明確な立場を取ることを助けてくれたのです。つまり彼はわれわれの探求と躊躇の時を縮めてくれたのです。私は自分が問うていた問題の大部分がブルトンとシュルレアリスムによって解決されていることに気づきました。言うなればブルトンとの出会いは、私が私自身の思索によって見出していたことが

真実であることの確証だったのです。⁽⁴⁶⁾

セゼールはブルトンとの出会い以降、意識的にシュルレアリスムを「武器」として用い、大戦後『奇跡の武器』(46年)として発表される作品群が書かれることになる。『奇跡の武器』に収録された反逆の詩劇『そして犬どもは黙っていた』も同じ時期の作品である。セゼールは『正当防衛』の詩人たちのようにシュルレアリスムに帰依したわけではない。しかし「シュルレアリスムの法王」ブルトンはセゼールを魅了し、それはかつて彼がこの「白い反逆」に対して保っていた距離を限りなく縮めることになったのである。

ブルトンのもう一つの認知は、セゼールの「偉大なる黒人詩人」としての認知である。『帰郷ノート』とセゼールの存在を最初に世界に知らしめたのはブルトンであった。ブルトンがニューヨークに渡った翌年には、セゼールと『熱帯』^{トロピック}の存在はすでにニューヨークだけでなく、ハイチ、キューバ、ベネズエラ、メキシコで知られていた。43年にはキューバで『帰郷ノート』のスペイン語訳が、ウィフレド・ラムの挿し絵、バンジャマン・ペレの序文をともなって出版され、44年にはニューヨークのフランス語誌『エミスフェール』にブルトンの『偉大なる黒人詩人』とともに『帰郷ノート』が掲載されている。

こうした評判がセゼールにひとつの機会を与える。44年5月から12月までの七ヶ月にわたるハイチへの講演旅行である。太平洋における日米戦開戦以後、アメリカ合衆国の食料補給国として一時的好況期にあったとは言え、独立以来一世紀以上にわたる政治的混乱を生きざるをえなかったハイチの貧困と悲惨は、セゼールの目にもはっきりと映っていたはずだが、セゼールに強烈な印象を残したのは、むしろ「ネグリチュードがはじめて立ち上がった」ハイチとの直接の出会いであり、クリストフ王の宮殿と山上の要塞だった。直後の45年1月の『熱帯』^{トロピック}12号が半ばハイチ特集号のような色彩を帯びただけでなく、これ以降セゼールは、政治家としての激務の合間をぬってハイチとトゥッサン・ルーヴェルチュール、デサリン、クリストフらその黒人指導者たちについての研究を続け、それは後に大著『トゥッサン・ルーヴェルチュール』(62年)、戯曲『クリストフ王の悲劇』(63年)となって結実することになる。セゼールにとって、ハイチは自らの「真正」さを示したカリブ海におけるもう一つのアフリカとなった。

6. 政治家セゼール

しかし、ここまで一貫してきた「反逆者」セゼールの歩みは、第二次世界大戦の終結とフランス第四共和政の成立を経て、急転して矛盾に満ちたものへと変わる。政治家セゼールの誕生である。

1945年5月、セゼールは同僚であり共産党員であったルネ・メニルらの要請を受け入れ、共産党候補としてフォル・ド・フランス市長選に立候補し、当選する。さらに10月には第一回制憲議会選挙においても共産党のリストで当選する。マルティニック選出の3名の議員のうち、セゼールを含め2名が共産党所属であった。対独抵抗で最も大きな犠牲を払ったフランス共産党は制憲議会の第一党となったが、白人、混血支配層がヴィシー派に加担したマルティニックでは、セゼールの個人的声望も相まって、その傾向がさらに明確に表れたのである。

『黒人学生』の盟友であったサンゴールも同じ選挙でセネガル選出の議員となり、社会党に所属した。ダマスもギアナで政治活動に身を投じ、48年から51年までギアナ選出国民議会議員を務めている。ダマスはまもなく政治から離れるが、サンゴールはフランス政府閣僚を経験した後、60年のセネガル独立とともに大統領となり、81年に引退するまでその職にあった。

セゼールは、この時以来、1993年に自ら引退を宣言するまで、第四共和政、第五共和政を通じて48年間マルティニック選出フランス国民議会議員を務め、フォル・ド・フランス市長については51年を経た現在もその職にある。

実を言うと、「政治家セゼール」についてはあまり語りたくない。文人セゼールは「非植民地化を急ぐこと」そして民衆に「魂を作り出すこと⁽⁴⁷⁾」を自らの責務とし、黒人知識人の責務とした。ところが、現実の政治家としてのセゼールが行った選択は、少なくともマルティニックに関しては、むしろその逆であったようにさえ思えるのだ。

セゼールは限りなく誠実かつ勤勉な政治家であった。しかし、その誠実さと勤勉さは、結果として、マルティニックをさらに漂白し、ベケの支配を温存し、もはや取り返しがつかないまでにフランスに依存する体質をマルティニックにもたらすことのみ貢献したように思える。「僻地手当」を受け取る本国派遣の公務員と現地採用の公務員間の差別待遇の廃止によって、マルティニックの公務員は全員が本国の給与水準の130%を受け取る。しかし、食料、日用品は必要量の実に70%を、しかも近隣諸国からではなく遠い本国フランスからの輸入に依存しているために、物価水準はそれを上回る。観光

を除けば、サトウキビ、バナナ、パイナップル以外の産業は事実上存在せず、その収入はとうていマルティニックの住民を養うに足りない。しかもそれすら大部分がベケたちによって握られている。失業率は35%に達し、人口わずか35万のこの島から毎年1万人が本国フランスに向けて旅立つ。セゼール自身が「入れ替えによる民族抹殺」を意図するものと悲痛な抗議を行った本国フランス政府のこの「移民」政策は、マルティニック人の送り出しと同時に毎年5000人の本国人をマルティニックに送り込んでいる。

マルティニックからはかつての悲惨な風景は姿を消しつつある。しかし同時に、セゼールが「帰郷」したマルティニックは徐々に自らを漂白し、セゼールが覚醒の檄を送ったマルティニック人は、いまや「民族」としては徐々に消滅しつつあるようにさえ思えるのだ。

言うまでもなく、こうした現状を理由にセゼールを断罪するのはあまりにも不当である。しかし、ここにはもはや「反逆者」セゼールの姿はない。巨大な渦に身を投じたセゼールは、『帰郷ノート』の前進するカヌーのイメージとは逆に、波に翻弄され、何度も舳先の向きを正し大きく漕ぎ出そうとしながら、ついには渦に呑み込まれてしまったかのようである。

(1) 「同化」法案

実は、政治家としての経歴の出発点から、セゼールの選択はすでに『帰郷ノート』のセゼールから逸脱し始めている。

11年後、共産党を離党するにあたってセゼールは『モーリス・トレーズへの手紙』⁽⁵⁶⁾において次のように書く。

いずれにしろ、われわれの闘い、すなわち植民地諸民族の植民地主義に対する闘い、有色人種諸民族の人種主義に対する闘いは、はるかに複雑なのです。いや、それどころか、それは、フランス資本主義に対するフランス人労働者の闘いとはまったく性格を異にするものであり、彼らの闘いの一部、一断片に過ぎないものと看做すことなど決してできないものなのです。⁽⁴⁸⁾

このことはメニルらの依頼に応じてフランス共産党に入党し、共産党リストに名を連ねるた45年の時点で、セゼールにとってはすでに明らかであったはずのことである。ただ、当時の状況の下では、セゼールの選択は植民地自身の政治家としてむしろ当然のものであった。フランス共産党はまったく新

しい時代状況の中で解放への希望を担い、とくに植民地にとっては、搾取と差別を批判し、平等を主張する唯一の本国勢力であった。46年に結成され、フランス領アフリカ植民地のほぼ全域にわたっていたアフリカ人政党、アフリカ民主連合(RDA)も共産党と連携していた。RDAがそうであったように、セゼールの選択も、入党し黨員となったとは言っても、いくつもの留保をともなったひとつの政治的連携であったと考えるべきなのだろう。たとえ、『モーリス・トレーズへの手紙』でセゼールが批判した、アルジェリアの民族主義者を「ブルジョワ反動」として断罪し、「同化」と「文明化」を「解放」の前提とするフランス共産党の姿勢が1930年代から一貫したものであり、人民戦線内閣によるメッサリ・ハジの「北アフリカの星」に対する37年の大弾圧以前から、フランス共産党は「階級意識ではなく民族意識を育てようとするブルジョア民族主義」に対する警戒を呼びかけていたとしてもである。

しかし、セゼールの発した「偉大なるニグロの叫び」によって覚醒した若い世代が、セゼールの「裏切り」としてもっとも激しく非難したのは、46年の第四共和政成立にあたってセゼールが起草し、その実現のために奔走した「海外県化」法案であった。

46年2月26日、セゼールはマルティニックとグアドループをフランスの「県」とする法案を提出するが、その提案演説は次のような言葉で始まる。

マルティニックとグアドループは1635年以来フランス領であり、3世紀来本国と運命をともにし、いくつもの段階を経て、母なる祖国の文明にさらに一層参入しようとして続けてきました。⁽⁴⁹⁾

そして、その20日前マルティニック評議会が採択した誓願を、セゼールは自らのものとして語る。

われわれは制憲議会に対して、1793年および1848年の革命議会にならい、マルティニックがフランス国民の不可分の一部であること、そしてマルティニックをフランス県として完全に同化することを要求します。(中略)われわれは同化を望みます。なぜなら、それは3世紀にわたるわれわれの成長の必然的帰結だからです。⁽⁵⁰⁾

今年(96年)、マルティニックでは「海外県化50周年」を祝う記念行事が相次いで催され、セゼールの肖像を大きく刷り込んだポスターがマルティ

ニック中に貼られていた。「同化」に対する拒否を歌い上げた「反逆の詩人」セゼールが、マルチニックに「完全な同化」をもたらした政治家として顕彰される皮肉は、それにしてもあまりに苦い。

たしかにこれについても、セゼールの選択を、セゼール自らが言うように「この時点で他に選択の余地のない」選択として擁護することはもちろん可能である。ヴェトナムで、アルジェリアで、マダガスカルで独立への動きが始まっていたとはいえ、46年の時点では、アフリカのフランス領植民地でも、第一の課題は独立ではなく市民権の拡大だった。この年、コートディヴォワールのウフェ・ボワニが提出した「ウフェ・ボワニ法」は植民地における強制労働の廃止をようやくもたらすものであり、セネガルのラミーヌ・ゲイエによって提出された「ラミーヌ・ゲイエ法」は、悪名高い「原住民局」制度を廃止し、アフリカ植民地住民のごく一部に条件付きのフランス市民権を与えるものに過ぎなかった。RDAの目標も「フランス共同体」内での市民権拡大と自治権拡大であり、独立が話題に上るのはフランス領アフリカでは50年代も終わりになってからに過ぎない。しかも当時人口わずか20万ほどのマルチニックでは、「独立」など「自殺」と同義語として理解されていたのである。そして何よりも、民衆の絶対的貧困への具体的処方箋をとまかく見出さねばならなかった。「同化」は政治家セゼールにとって唯一可能に見えた「現実主義的」選択であった。

しかし、これについても後の世代は「なぜ、カリブという地域が目に入らなかったのか」と言うだろう。実際、アジア、そして英領アフリカだけでなく、英領アンティル諸島においてもすでに自治、そして独立への動きはこの時すでに始まっていた。

(2) 『植民地主義論』

47年、冷戦の始まりとともにフランス共産党は政権からは排除され、アジア、アフリカの植民地で反植民地主義の動きが拡大していくとともに、フランス植民地主義はその反動性をあらわにし始める。

この年、マダガスカルで民衆が蜂起し、フランス軍と入植者が9万人近いマダガスカル人を虐殺する。ヴェトナム、カンボジアではフランスは一旦与えた独立の約束を反故にし、大量のフランス軍を投入する。

セゼールの「海外県化」法案さえ、植民地大臣マリウス・ムテによってその適用が遅らせられることになる。ましてや、平等原則を完全に適用すれば「本国人」が少数派に転落することになるアフリカにおける「同化」など、フランスにとっては問題外であることはすでに明らかだった。アフリカでは

自治要求へと動きは展開していく。アンティルの「海外県」は取り残されていた。経済的停滞と「本国人」と「現地人」の差別法の残存は民衆の不満を拡大させていくが、一共産党代議士にすぎないセゼールにできることは、政府に対する抗議と要求を繰り返すことだけであった。それも政治的「同化」と経済的「同化」を求める要求である。しかし、セゼールは孤立無援であった。

失望したセゼールはフランス共産党との溝を徐々に深め、希望をアフリカの状況の進展に託するようになっていく。

50年3月、政府は反植民地の動きを牽制するために植民地における表現の自由を制限する法案を提出する。ちょうど同じとき、共産主義者であり、インドシナ戦争に反対するフランス軍人アンリ・マルタンが逮捕される。後に「アンリ・マルタン事件」と呼ばれる事件である。セゼールは国民議会においてこれに激しく抗議するが、右派も左派も、大多数の議員が逆にセゼールを口を極めて非難するという事態になった。そのときの議事録は当時の国民議会の雰囲気をよく伝えている。

〈マルセル・ポワンプフ〉 フランスがなければ、あなたはどうなっていたと思いますか。

〈エメ・セゼール〉 誰にも自由を奪われることのなかった人間だったでしょう。

〈ポール・テータン〉 ばかばかしい。

〈ポール・カロン〉 あなたは祖国を侮辱している。

(右派席から) 何という恩知らずだ!

〈モーリス・ペイルー〉 読み書きを教えてもらって有り難いと思わないのか。

〈エメ・セゼール〉 ペイルー議員、私に読み書きを教えたのはあなたではありません。私が読み書きを学ぶことができたのは、いつの日か自分たちのために弁じることができるようにと、自分たちの息子たちの教育のために血と汗を注いだ幾千幾万のマルティニク人の犠牲のおかげなのです。⁽⁵¹⁾

サンゴール、ダマスとともに社会党議員として与党席、つまり政府の植民地政策を支持する側にいた。セゼールの失望と孤立感は極限にまで達していた。これ以降、セゼールは3年以上にわたって議会では沈黙を守る。しかし、

マルティニックの支持者のために議席は守らねばならなかった。また、共産党議員として党の規律に従うこともセゼールの義務であった。

『植民地主義論』が書かれたのはこの三ヶ月後のことだった。セゼールは後に次のように回想している。

これは状況の産物です。ここで言ったことはずっと以前から考えていたことです。(中略)ある日、右派の雑誌が植民地支配について私に原稿を求めてきたのです。この雑誌は私が植民地事業の賛美を行うものと信じていました。依頼が執拗なので私は答えました。わかりました。ただし、思っていることを自由に言わせてもらいたい。それでよいと言うので、私は渾身の力を込めて、胸にたまっていたことをあらいざらい言いました。

(中略)それは、ある意味では、国民議会の演壇で言うことのできなかったことをすべて吐き出す機会でもありました。⁽⁵²⁾

50年にレクラム社から出版された際には、『植民地主義論』はそれほど注目を集めなかったが、ディエンビエンフーでフランス軍が決定的な敗北を喫し、アルジェリア解放戦争が始まった翌年の55年にプレザンス・アフリケーヌ社から増補改訂版が出版されると、『帰郷ノート』と並ぶたぐい稀な力を持った著作として大きな反響を巻き起こした。ロジェ・カイヨワと『ル・モンド』のイヴ・フロレンヌは、『ル・モンド』紙上でセゼールを「人種主義者」として激しく非難する。このころフランスでは「アジアは手放し、アフリカを守り抜こう」というスローガンが叫ばれており、アルジェリアは植民地ですらなく「単一不可分のフランス」そのものであった。いずれにせよ、植民地支配の「逸脱」、あるいは「搾取」の批判は喜んで共有する「進歩的」知識人の大多数にとっても、植民地支配の「文明化」の意義までも否定するなどということは、およそ受け入れがたいことだったのである。

しかしこの間、ブルトンの序文をともなった『帰郷ノート』のボルダス版が出版され、また、『奇跡の武器』(47年)、サルトルの「黒いオルフェ」を序文としたサンゴールの『ニグロ・マダガスカル新詩歌集』(48年)が注目されることで、詩人セゼールの名声はすでに揺るぎないものとなっていた。さらに、前／反キリスト教的神話を歌った『太陽、切られた首』(48年)、ピカソの「ニグロの頭」を扉絵としたマルティニックのためのイメージ『失われた身体』(50年)が出版される。また、47年の「プレザンス・アフリケーヌ」社の創設にもセゼールは参加している。

(3) 共産党離党、『モーリストレーズへの手紙』

54年、55年と、政治家セゼールは「海外県」の「完全同化」のために抗議と要求を繰り返し続けた。しかし「海外県化」の試みが失敗に終わったことはもはや明らかだった。「無言の、不毛の大地」マルティニックが尊厳を取り戻す兆しは見られなかった。

『モーリス・トレーズへの手紙』は、むしろ遅きに失した政治家セゼールの原点への回帰の、しかし恐らく最後の試みだった。

56年、すでに大きく広がっていたセゼールとフランス共産党の間の亀裂を決定的にする事件が相次いで起こる。

56年2月、フルシチョフによるスターリン批判が行われる。しかし、「モスクワの長女」フランス共産党はそのスターリン主義的体制を堅持する。

3月、フランス共産党はギ・モレ内閣に植民地問題における全権を委任する投票に賛成票を投じる。アルジェリア解放戦争に対する徹底的武力弾圧に同意したのである。

6月、ポーランドにおいて死者53人を出したポズナン暴動が起こり、スターリン主義批判は各国に波及していく。

そして10月23日、ハンガリーにおいてブタペスト市民が蜂起した日、セゼールはフランス共産党書記長モーリス・トレーズに対して共産党離脱の書状『モーリス・トレーズへの手紙』を送る。

(われわれ黒人は〈引用者〉) いっさいの同盟関係を蔑み、単独で闘いを進めようと望んでいるのではなく、同盟と従属、連帯と責任放棄を混同しないことを望んでいるのです。ところが、われわれがフランス共産党員に見出すいくつかの明白な欠点のなかでも、とりわけわれわれにとって重大な脅威となっているのがその混同なのです。すなわち、彼らの凝り固まった同化主義、無意識の排外主義、彼らがヨーロッパのブルジョアと共有する西欧の全面的優位についての素朴極まりない信念、ヨーロッパで起こった進歩の形のみが唯一可能で、唯一望ましく、全世界が同じ道を辿らなければならないという信仰、要するに、あからさまに言われることは稀だが、確固とした大文字の「文明」、大文字の「進歩」への信仰です。⁽⁵³⁾

モーリス・トレーズは共産党機関誌『リュマニテ』紙に短いコメントを載せただけだったが、マルティニックでは共産党支持者からセゼールの「裏切

り」に対して激しい非難の声が上がった。

57年1月、セゼールは共産党リストで選出されていたフォル・ド・フランス市長を辞任し、2月、自らのリストで再選された。セゼールは自らの政党として「マルティニック進歩党(PPM)」を結成する。しかし、マルティニックの地域利害を代表するセゼールを選出するための間に合わせの政党であり、明確な方針も綱領も持たない政党だった。まもなく PPM は「自治」をスローガンとして掲げるようになるが、マルティニック人の生活水準の向上のためのいわゆる「ドブ板政治」においては一定の成果を上げながらも、本国の政治の流れに翻弄され漂流を続けることになる。

この間にセゼールはアフリカへの傾斜をさらに強める。56年9月、共産党離党の一ヶ月前にソルボンヌで開かれた第一回「黒人作家芸術家会議」において、セゼールは「文化と植民地化」と題する講演を行い、次のように述べている。

すべての文化は、その危機のときには、そしてさらにその意識化のときには、源泉への回帰の必要性を痛感するものです。(中略) アフリカ文化を復権することは、われわれにとっては民衆文化を復権することであり、またその逆も真なのです。⁽⁵⁴⁾

58年3月の PPM 結成大会でセゼールは「自治」の方針を新たに提示するが、連邦制に基づく「自治」の構想はアフリカ植民地にも適応できるとセゼールは考えていた。アフリカが復権されることによってマルティニックにも新たな道が開ける、という期待がセゼールにはあったようである。後にセゼールは言うだろう。

アフリカの挫折よりもアンティルにおける挫折の方が、私はより容易に自らを慰めることができるでしょう。⁽⁵⁵⁾

そしてこのセゼールのアフリカへの傾斜と期待は、後の世代にとっては、マルティニックの軽視、あるいはマルティニックの民衆へのセゼールの不信として映ることになる。

(4) 「ウイ」：フランス共同体国民投票

若い世代のセゼールに対する批判のもう一つの焦点は、アルジェリア危機で登場したドゴールの「フランス共同体」を問う国民投票における「ウイ」

の選択である。

ギニアでは、セク・トゥーレが「われわれは隷従の中の豊かさよりも、自由の中の貧困を選ぶ」と宣言し、国民投票では95%が「ノン」を投じて即時独立を選択した。そのセク・トゥーレを讃える詩を書いたセゼールがなぜ「ウイ」をマルティニック人に呼びかけたのか。

セゼールは後に「私は騙されたのだ」と言うだろう。実際、セゼールはドゴールによって欺かれた。58年8月に発表された憲法草案では「海外県」の選択権が全面的に否定されていたために、セゼールは当初「ノン」の呼びかけを考えていた。ところが9月、アンドレ・マルローがドゴールの特使としてアンティル、ギアナを歴訪し、マルローを通してドゴールから「マルティニックにおける圧倒的な『ウイ』は『自治』への道を開くであろう」との言質を与えられたことで、セゼールは「ウイ」の呼びかけを決意したのである。しかし、言うまでもなくドゴールにもマルローにもこの「海の上の埃」に過ぎない島など念頭にはなかった。無論「自治」など問題外であった。あまりにたやすく騙されたセゼールの無邪気さの方が、むしろ理解しがたい。

セゼールへの最も厳しい批判者の一人は、かつてのセゼールの崇拜者フランツ・ファノンであった。ファノンは、セゼールの「ウイ」の選択を「変節」として断罪するだけでなく、それに続いたアルジェリア問題についてのセゼールの沈黙を、明らかな「裏切り」として批判するのである。

59年3月、第2回「黒人作家芸術家会議」がローマで開催され、セゼールは「文化人とその責務」⁽⁵⁶⁾ という講演を行う。文化人の責務は非植民地化を急ぐこと、しかも良い非植民地化を準備することである、とセゼールは言う。そしてそのために民衆に「魂を作り出す者」でなければならない、と。しかし、マルティニックでは社会不安が激化し、12月には3人の死者を出す暴動が起こる。独立を唱える急進派のセゼール批判は激越さをまして行くが、同時に本国政府は海外県に対する支配権を強化し、独立派に対する弾圧は容赦がなかった。セゼールは本国政府への抗議を繰り返すが、事態を覆す権限はセゼールにはなかった。

60年、アフリカのフランス領植民地は雪崩を打ったように次々と独立する。サンゴールはセネガル大統領となった。しかし、それは新植民地体制の始まりでもあった。セゼールはコンゴ動乱におけるルムンバの悲劇に強い衝撃を受ける。しかし、マルティニックにおいても、状況は重大な転換点を迎えていた。

61年、本国に「海外県移民局」が設置される。無料の片道切符で海外県の

住民を本国に「移民」させ、同時に大量の本国官吏を送り込むというものである。「植民地問題」の「解決」と同時に、「海外県問題」の歴史と人種の特異性を、人の入れ替えによって解決しようとする政策であった。セゼールはこの「入れ替えによる民族抹殺計画」に悲痛な抗議の声を上げるが、耳を傾けられることはなかった。

この激動の期間にもセゼールは詩作を続けている。60年に発表された『鉄鎖』では、苦渋の過去を想起し、未来の再生への希望がアフリカに託して歌われる。61年には『太陽、切られた首』、『失われた身体』の詩を大幅に修正して再録した『土地台帳』が出版されている。しかしこれ以降、セゼールは詩作から遠ざかる。次の、そして最後の詩集が発表されるのは20年後のことである。

セゼールの関心はハイチとその歴史に集中していく。62年、大作『トゥッサン・ルーヴェルチュール』が完成し、その翌年には戯曲『クリストフ王の悲劇』が発表される。同じ年、ルムンバの悲劇に取材した戯曲『コンゴの一季節』が書かれる。さらに68年にはシェークスピアの『嵐』の翻案劇を発表している。

劇作はマルティニックの民衆に「魂を作り出す」ための、文人セゼールの実践としての性格を持っていた。しかし、これらの戯曲が上演され高い評価を受けたのは主にヨーロッパにおいてであった。

セゼールは60年代後半以降のアメリカ黒人のブラック・パワー、ブラック・パンサーの動きに強い関心を抱き、戯曲『暑い夏』の構想を抱くが、結局この作品は書かれることはなかった。

(5) 「自治」から「モラトリアム」へ

セゼールとマルティニック進歩党は、73年まで「自治」のスローガンを掲げ続ける。しかし74年、ジスカルデスタンが大統領となり、保守派のセゼールに対する敵意が露に示され始めると、マルティニック進歩党は独立派に歩み寄り、「マルティニック民族」の「主権」の回復をスローガンとして掲げるようになる。しかし、「独立」に向けての具体的なプログラムが真剣に検討されることはなかった。

81年、ミッテラン社会党政権の誕生に際して、セゼールとマルティニック進歩党は、ミッテランへの投票を呼びかける。マルティニックの投票結果は圧倒的にジスカルデスタン支持であったが、セゼールとマルティニック進歩党は新政権の与党となった。政策は「モラトリアム」へと変わった。「自治」要求を取り下げ、新政権の下でマルティニックの経済発展を第一の目的

とする、というものである。再びセゼールは、フランスの「善意」に期待をかけたのである。確かに翌年、ミッテラン政権は一部地方分権化を進め、マルティニックにも一定の権限を持った地方議会が設置された。しかし、まもなく始まった保革共存によって、セゼールの期待した「善意」は失速を余儀なくされた。

翌82年、セゼール最後の詩集『私、ラミナリア』が発表される。その巻頭言は、あたかも自らの挫折を自ら慰めているかのようにさえ読める。

非・時間は時間を自らの空間性の専制の下においている。あらゆる人生には北と南があり、東洋と西洋がある。その最果てには、あるいは少なくともその交差点には、飛び去った季節季節に沿って、生と死の、熱情と明晰さの不均等な闘いがある。たとえそれが絶望と落胆に終わるものであったとしても。そして常に明日を見つめる力がある。あらゆる人生はそのようなものだ。(後略)⁽⁵⁷⁾

75年から81年にかけて書かれたこれらの詩は、セゼールの数十年にわたる闘いの一つの総括であると言ってもいい。しかし、この詩集の中では、セゼールは常に希望を甦らせようとしながらも、深い絶望感に身を委ねているかのようだ。深い絶望感に身を委ねながらも、常に希望を甦らせようとしている、と言うべきなのかもしれないが。

そして93年、2年後のミッテラン政権の終了を前に、セゼールは国民議会議員選挙への不出馬を宣言し、自らの政治家としての経歴を閉じた。セゼールは現在もフォル・ド・フランス市長だが、これももはや象徴的職務に過ぎない。

(6) 「パパ・セゼール」

政治家セゼールについて、あまりにも否定的な側面を強調しすぎたかもしれない。多くの、しばしば正当な批判にもかかわらず、セゼールがマルティニックで、常に人々の敬愛の対象であり続けた事実も強調しておくべきだろう。「現実主義的」政治家セゼールは、マルティニックの民衆の生活のために、自らの理想との矛盾を意識しながらも、誠実に奮闘し続けたのである。「パパ・セゼール」の姿を伝えるある一節を引いておきたい。

あたしが同化っていうのが何のことを教わったのはアルシピアッド旦那からだけど、その法案をフランスの議会に持ち込んで、ベケどもの鼻を

明かしてあたしたちをフランスの海外県にしてくれたのは、エメ・セゼール、あたしたちのパパ・セゼールだったんだよ。あたしはバジルやテル奥様やアルシビアッドさんがあの人のことを話すのを聞いていたけれど、それによると、あの人はあたしの大事なエステルノムより真っ黒な黒ニグロで、最近陸揚げされたばかりで町中の光に触れたこともないまま丘に巣食っている半分白痴のコンゴどもと見間違うぐらいに真っ黒だっている話だったよ。それで、この黒ニグロはフランス語を分厚い辞書よりよく知っていて、一目で辞書の間違いを見つけられるほどだっているんだ。聞くところでは、こいつはあたしたちにゃ言っていることの半分もわからないほどすごいフランス語をしゃべるって話で、詩も歴史もギリシャもローマもラテン人文学も哲学も完璧に知ってるそうだ。要するに、フランスの白人の一番の頭でっかちよりも物知りで、教養があって、すごいということだ。脚韻も韻律もない奇妙な詩を書いているそうで、自分から自分はニグロだと名乗りをあげて、その上そのことを誇りにしているらしい。最悪なのは、植民地主義を非難するなんていう恩知らずなことをやっていることで、フランスが読み方を手ほどきし、書き方を教えてやったのに、自分はアフリカ人だと言ってそれを声高に主張する始末なんだってさ。(中略)セゼールが共産主義者だっていることもアルシビアッド旦那を啞然とさせていたよ⁽⁵⁸⁾

1848年の奴隷解放以前から現代までのマルティニックの民衆の歴史を民衆の視点から物語った小説『テキサコ』(1992年度ゴンクール賞)のなかで、『クレオリテ讃歌』の署名者の一人でもあるパトリック・シャモワゾーは、語り手マリ・ソフィーに、1946年、フォル・ド・フランス市長に立候補したセゼールについてこう語らせている。フランス的教養を完璧に身につけた奴隷の子孫、「偉大なるニグロの叫び」を発したネグリチュードの詩人、植民地帝国フランスの似而非普遍主義の断罪者、そしてマルティニックの貧困層に「パパ・セゼール」として敬愛され、その後ほぼ半世紀にわたってフォル・ド・フランス市長、マルティニック選出国民議会議員を務めたエメ・セゼールの姿が見事に浮かび上がってくる。

これも政治家セゼールのひとつの肖像である。

7. クレオリテとセゼール

最後に「クレオリテ」の主張者たちとセゼールの関係について簡単に触れ

ておきたい。

「クレオリテ」の主張者たちがしばしばセゼールに言及することから、セゼールをクレオール性の代表者のように誤解している向きもあるが、セゼール自身はクレオール性に対しては一貫して否定的であり、「クレオリテ」の主張者たちが排除する「普遍」にむしろ強く傾斜していたことは言うておく必要があるだろう。そして『クレオリテ讃歌』の署名者たちがセゼールの限界として指摘することは、彼が「普遍性の強迫観念にとらえられ」クレオール性に自らの足場を見出しえなかったということなのである。

ジャン・ベルナベ、パトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアンら『クレオリテ讃歌』の三人の署名者は、セゼールまでのアンティル文学を「外在性」としてとらえ、セゼールまでの発展を次のように三段階に整理している。

第一段階、フランス文化の模倣の段階。

第二段階、模倣の批判と土着化の試みの段階。しかし、それはフォークロアを求める他者の眼差しに貫かれたものにとどまっている。

第三段階、セゼールのネグリチュード。他者の眼差しを拒絶し、初めて正当な自己意識をクレオール社会に与えるもの。しかし、それは同時に「アフリカ」あるいは「大文字のニグロ」という別の形の外在性をもたらした。

彼らは言う。セゼールはネグリチュードによってヨーロッパとアフリカという二つの外在性を閉じ、開くという特権を持った。そして、否認され否定された文化の内にわれわれのアイデンティティを住まわせようとする、その頑強な意志こそがわれわれの尊厳の回復の第一歩を踏み出させたのだ、と。それは不可避の道であった。だが、セゼールもアンティルにおける外在性の根元である普遍主義の強迫観念にとらわれていた。セゼールの失敗の理由はそこにある、と。

つまり、セゼールは「白い普遍」から身を引き剥がし、「他者」としての自己を確立しようとしたとき、マルチニックを素通りしてしまい、「アフリカ」という外在性に別の普遍を託してしまったというのだ。セゼールは最後までクレオール語とクレオール文化を「遅れた文化段階の言語」、「紛い物の文化」とみなし続けた。真正の文化は「白い普遍」のなかか「黒い普遍」としてのネグリチュードのなかにしかあり得ず、しかもセゼールにとって唯一の言語はフランス語であった。『クレオリテ讃歌』の署名者たちは「似非普遍主義、単一言語主義、純血主義」の否認としての、「多様性なるもの」としてのクレオール性、複合性こそがアイデンティティの基盤になりえると考える。

「普遍主義」の強迫観念に足をすくわれることなく、この多様性の中から出発すべきなのだ。

セゼールが彼らの批判と主張をどのように受け止めているのか、それを伝える資料を私は目にしていない。俗流に理解されたドゥルーズのように軽やかな「逃走」を語る彼らには、ある種の危うさがある。しかし、セゼールの歴史的な限界を鋭くとらえながら、セゼールの踏み出した一步を決定的な一步としてとらえ、政治家セゼールがなしえなかった「われわれの尊厳回復」の次の一步を踏みだそうとする彼らが、彼ら自ら主張するように「セゼールの息子」たちであることは間違いのない事実である。

すべての単一言語に固定化された「国民文化」はクレオール文化から出発している。西欧の世界化のプロセスは「国民国家」形成のプロセスの中で自らの文化の雑種性、クレオール性をそぎ落とし、単一性の下に回収していったプロセスをそのまま踏襲していると言ってもいい。現代の世界におけるクレオール性の主張は、ネグリチュードが30～40年代に切り開いたような新しい地平を、すでにネグリチュードを回収し終わった「普遍」に対して新たに提出しようとする試みとして見ることができるだろう。それはセゼールのネグリチュードがそうであったように、強いられた歴史もその歴史によって蒙られたゆがみも引き受けた上で、自らの生きる足場を確保しようとする意志であり、「回収」されるネグリチュードに代わる足場を見出す試みである。

ただ、あるがままのクレオール性の礼賛はかつての「未開社会」の礼賛と基本的には同質の危険をはらんでいる。理想化された「未開社会」が拒否したい現実を鏡に作り出された虚偽であったのと同様に、「クレオールの現実」は虚偽である。圧倒的フランス語支配と人々の生活のほぼ全般にわたるフランスへの従属構造の中で、「クレオリテ」は、ネグリチュードがそうであったようにひとつの神話であることを忘れてはならない。

ネグリチュードは、一つの神話であるがゆえにこの現実に裂け目を生じさせる力を持った。セゼールがアメリカ黒人文学に見出した「不寛容」、この現実の拒否、乗り越えを志向する「不寛容」が生み出す力を、「クレオリテ」という多様性の神話は持ちえるのだろうか。

【註】

- (21) René Maran, *Batouala*, Albin Michel, 1938, rééd. 1965, p.11.
- (22) Cité par Albert Darnal, "René Maran, cet homme pareil aux autres", in *Hommage à René Maran*, Présence Africaine, 1965, pp.77-89.
- (23) Aimé Césaire, "Introduction à la poésie nègre américaine" in *Tropiques*, No.2, juillet 1941, pp.37-42, reproduction Jean-Michel Place, 1978.
- (24) *Légitime Défense*, "avertissement", p. 2, reproduction, Jean-Michel Place, 1979.
- (25) Etienne Léro, "Misère d'une poésie", in *Légitime Défense*, op. cit., p.10.
- (26) *ibid.*, p.12.
- (27) ジャン＝ポール・サルトル、『シチュアシオンⅢ』所収、「黒いオルフェ」(鈴木道彦、海老坂武訳)、白水社、1964、p.179。
- (28) René Ménil, "Préface", in *Légitime Défense*, op. cit.
- (29) Jean Price-Mars, *Ainsi parla l'oncle*, cité par Lilyan Kesteloot, *Les écrivains noirs de langue française: naissance d'une littérature*, Ed. de l'Université Bruxelles, 1963, p.36.
- (30) Lilyan Kesteloot, *ibid.*, p.101.
- (31) Léopold Sédar Senghor, "Ce que l'homme noir apporte", in *L'Homme de couleur*, 1939, reproduit in *Liberté I, Négritude et l'humanisme*, Le Seuil, 1964, p.24.
- (32) Leo Frobenius, *Histoire de la civilisation africaine*, p.12, cité par Jacques Corzani, *La littérature des Antilles, Guyanes Françaises*, Tomes 3, p.286.
- (33) *ibid.* p.292.
- (34) *ibid.*
- (35) *ibid.* p.295.
- (36) Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, Présence Africaine, 1983, p.47.
- (37) Léon Gontran Damas, *Notre Génération*, cité par Lilyan Kesteloot, op. cit., p.91.
- (38) Lettre de Césaire citée par George Ngala, *Aimé Césaire, un*

homme à la recherche d'une patrie, Présence Africaine, 1994, p.80.

(39)Entretien de Césaire cité par Gerge Ngal, *ibid.* p.82.

(40)Aimé Césaire, “Nègrerie”, *op.cit.*, p.326.

(41)『地に呪われたる者』、前掲書、p.125.

(42)『帰郷ノート』は、この第一草稿発表後、さらに何度も加筆、修正が行われ、1956年にようやく決定版として確定したものである。56年は、後述するように、共産党代議士となっていたセゼールが『モーリス・トレーズへの手紙』を書いてフランス共産党を脱党した年である。ある意味では、そのときまでセゼールの「帰郷」は完結していなかったのである。

第一草稿が発表されてから17年の間に、ストローフの変更や語の入れ替えまで含めれば、セゼールは数次にわたって数多くの修正、加筆を行っているが、重要な相違は、決定版に存在し第一草稿には存在しない以下の六つの部分である。ページ数、行数は、1983年のプレサンス・アフリケーヌ社版(Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, Présence Africaine, 1983)に基づく。

[1]p.7,l.1, “Au bout du petit matin...” から p.7,l.15, “arpenté nuit et jour d'un sacré soleil vénérien. まで。

[2]p.20,l.6, “Partir.” から p.22,ll.3-4, “la terre où tout est libre et fraternel, ma terre”まで

[3]p.26,l.23, “Au bout du petit matin ces pays sans stèle,” から p.34,l.11, “les premières gouttes de lait virginal!”まで。

[4]p.45,l.1, “vienn le colibri” から p.46,ll.12-13, “que le ventre tremblant de la femme porte comme un minéral!”まで。

[5]p.53,l.19, “Tenez, suis-je assez humble?” から p.55,l.16, “Naufrage ton enfer de débris! j'accepte!”まで。

[6]p.62,l.19, “par la mer cliquetante de midi”から p.63,l.21, “reçois et perçois fatal calm triangulaire”まで。

(43)Aimé Césaire, “Présentation”, *Tropiques*, No.1, avril 1941, pp.5-6, reproduction Jean-Michel Place, 1978.

(44)Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, Présence Africaine, 1983, p.26.

(45)“Entretien avec Aimé Césaire par Jacqueline Leiner”, in

Tropiques, op.cit., p.v. ジュールダン氏はモリエールの『町人貴族』の主人公。言葉は散文と詩に分類されると教わり、自分がそれと知らずに実は散文を作っていたのだと感動する。

- (46) *ibid.*, p.vi.
- (47) Aimé Césaire, “L’homme de culture et ses responsabilités” (2^e Congrès International des Ecrivains et Artistes noirs – Rome, 1959), in *Premiers jalons pour une politique de la culture*, Présence Africaine, 1968, pp.36-42.
- (48) Aimé Césaire, *Lettre à Maurice Thorez*, Présence Africaine, 1956, pp.8-9.
- (49) Cité par Raphaël Confiant, op.cit., p.159.
- (50) Cité par George Ngala, op.cit., p.235.
- (51) Cité par Roger Toumson, Simonne Henry-Valmore, *Aimé Césaire – Le nègre inconsolé*, Ed. Syros, 1993, p.112.
- (52) Cité par George Ngala, op.cit., pp.238-239.
- (53) Aimé Césaire, *Lettre à Maurice Thorez*, op.cit., pp.10-11.
- (54) Cité par Roger Toumson, Simonne Henry-Valmore, op.cit., p.163.
- (55) “Entretien avec Césaire” in L. Kesteloot, B.Kotchy, op.cit.
- (56) Aimé Césaire, “L’homme de culture et ses responsabilités”, op.cit.
- (57) Aimé Césaire, *Moi, laminaire...*, Seuil, 1982, p.9.
- (58) Patrick Chamoiseau, *TEXACO*, Gallimard, 1992, p.274.